



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099 (226) 5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



年頭の辞 鹿兒島教区 司教 中野 裕 明

教皇訪日とシノドスを経て今後の展望

「まず神の国とその義を求めよ、そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(マタイ6・23)



1.「教会の3つの柱」部会を鹿兒島地区と奄美地区の両地区に作る

「まず神の国とその義を求めよ、そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(マタイ6・23)

鹿兒島教区のみならず、新年あけましておめでとうでございます。

昨年私たちはとても大きな恵みに満たされました。それは「教区シノドス」を開催できたこと、教皇フランシスコを日本にお招きできたことです。

教区シノドスでは、短い準備期間にもかかわらず、百数人の参加者を得て、親しい交わりの中で忌憚のない議論を交わし、11の提言と36の具体的案を私に提出してくださいました。心から感謝申し上げます。

一方、教皇さまの訪日について言及しなければなりません。訪日中、教皇様から発せられたすべてのメッセージは、どれも重要なもので、かつ、私たちキリスト信者がすぐにでも実行に移

すべき事柄が満載されています。この2つの出来事を加味しながら、今後の鹿兒島教区の動きを開示いたします。

2.事を進めるにあたって重要なこと

信徒のみならず、この世の社会秩序の中で、その秩序に準じて生活しています。しかし信仰者の集まりである教会はそうでないこととはご存知です。カトリック

長崎でのミサに 教皇から600人

教皇フランシスコが11月23日(土)から26日(火)まで日本を司牧訪問し、いのちと平和の大切さを訴えた。教皇が日本を司牧訪問したのは、聖ヨハネ・パウロ2世以来のことで、38年ぶり。

教皇フランシスコは、今回の訪問で長崎・広島の原爆被災地では核兵器のない世界の実現を訴えたほか、

為政者に核廃絶を早急に実現するように呼びかけた。また東日本大震災の被災者との集いや若者たちとの集いなどでも、多くの人々にその温かい人柄と強いメッセージで、一人ひとりが大切されること、大切にすることの重要性を訴えた。

司牧訪問中には長崎と東京でミサがささげられ、鹿



ク教会には位階制度があるのです。洗礼を受けた信者と、司祭叙階を受けた信者との階層の違いです。洗礼も叙階も両方とも秘跡で、みんなキリストの祭司職、預言職、牧職(王職)にあずかっています。教会は、これらの洗礼を受けた信者と、叙階の秘跡を受けた司祭とによって運営されています。

この二つは丁度車の両輪のようなものです。父なる神に礼拝をささげる典礼で

兒島教区からも大勢が参列した。

24日(日)午後、長崎県営野球場(ビッグNスタジアム)でささげられた教皇ミサには、鹿兒島教区から約600人が参列。鹿兒島からの信者たちは、個人で、また小教区ごとに教区本部を通して参列を申し込み、それぞれに日帰りや長崎観光を組み入れたツアー企画するなどした。

は、司祭は神の民の代表として祈りを司式しますが、宣教活動をする教会の運営については、信徒と司祭は平等なものです。つまり、教会は、神の民の神への垂直軸と司祭と信徒の水平軸で成り立っているのです。この原則さえ、しっかりと守られているなら、安心です。

3. 宣教活動の目的(方向性)をしっかりと定めることが大事

教区のモットーである「まず、神の国」は先日の教皇さまの東京ドームでの説教で引用されました。しかも、「そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」まで語られました。「これらのもののみ」とは私が先にお話しした事柄であります。神に感謝!

24日、長崎市は朝から激しい雷雨に見舞われ、ミサ会場に足を運ぶ信者たちは雨具に身を包み、入場には予想以上に苦労した様子だった。それでもミサの始まり2時間ほど前には、雨雲も去り、強い日差しに祝福された。

「今来た! パパ」の歌声に包まれながら教皇がパパ専用車に乗って入場してくると会場を揺るがすような大きな声「パパ」が響き、あちらこちらで感激の涙を流す信者たちの姿が見られた。

3万人余りの信者が見守るなか進められたミサで福音を朗読したのは鹿兒島教区の諏訪勝郎助祭。手話を交えながらその大役を果たした。ミサは2時間ほどで終わり、教皇とともにミサにあずかることのできた感激を胸に家路につく信者たちの満足した姿が見られた。

2020年 新しい年も神の祝福で満たされますように!

- ### 鹿兒島教区の司祭・助祭 (敬称略)
- 教区 長 中野裕明
 - 名誉司教 郡山健次郎
 - 司教総代理 泉 浩二
- ### 本土地区
- P・アン (始良教会)、郡山健次郎 (指宿教会)、朴 鎮亮 (加世田教会)、泉 浩二 (鴨池教会)、小隈憲士、李 秉徳 (サビエル教会)、頭島 光、G・ボスコ (谷山教会)、栃尾泰英 (種子島教会)、李 秉徳 (玉里教会)、山口好信 (紫原教会)、鄭 法鍾 (吉野教会)、O・ベルナルディーノ (鹿屋教会)、丸野六雄 (垂水教会)、J・サンタマリア (国分教会)、寝占敦之 (志布志教会)、朴 昶奎 (溝辺教会)、坂本 進 (阿久根教会)、鄭 成淙 (出水教会)、J・ハンマ (入来教会)、橋口啓悟 (大口教会)、T・メニッヒ (川内教会)
- ### 大島地区
- 内野洋平 (大笠利教会)、松永正男、田端孝之 (古仁屋教会)、鈴木康由 (小宿教会)、J・タム (大熊教会)、宋 診旭 (瀬留教会)、G・ティエン (名瀬聖心教会)、松永正男、田端孝之 (古田町教会)、福崎英雄 (徳之島)、福崎英雄 (沖永良部)
- ### 教区本部
- 中野裕明、末吉卓也
- ### 司教館
- 永山幸弘
- ### その他
- 小川靖忠 (YBU本部)、貴島丈弥、霧島彬 (イタリア留学)、田原 章、成相明人 (引退)
- ### 助祭・終身助祭
- 諏訪勝郎 (神学院)、桃蘭淳一郎 (鴨池教会)、池上聖行、池上利男 (徳之島教会)、久保俊弘 (谷山教会)、川口 茂 (加世田教会)、石神秀人 (阿久根教会)、小島芳武 (川内教会)、四條淳也 (喜界島教会)
- ### 司祭評議会
- 中野裕明 (会長)、泉 浩二 (副会長)、末吉卓也 (事務局長)、松永正男、頭島光、福崎英雄、J・サンタマリア、栃尾泰英、O・ベルナルディーノ、G・ティエン (以上、評議員)
- ### 教区顧問
- 頭島 光、泉 浩二、内野洋平、O・ベルナルディーノ
- ### 責任役員会
- 中野裕明 (代表役員)、永山幸弘、小隈憲士、泉 浩二

立て、行こう！高校生と韓国巡礼①

青少年司牧担当司祭

李イビョンドク 秉徳

(ザビエル教会助任)

鹿児島教区の高校生たちと「立て行こう！」(マルコ14・42)というテーマで8月18日から21日まで韓国聖地巡礼を実施した。皆さんの関心と助けなしには不可能な巡礼だった。その方々に、特に巡礼に参加した大切な高校生たちに感謝の気持ちを伝えたい。

始まり

韓国聖地巡礼を計画したのは、名瀬の聖心教会で会った2人の女子高生がきっかけ。熱心にミサにあずかっていたその女子高生に「韓国に聖地巡礼行こうか」と、私が声をかけた一言からだった。半分は冗談だったが、その女子高生たちは、私の言葉を信じて本当に熱心に教会に来た。だから「これは、行かなければ、彼らに申し訳ない」と思った。それで具体的に考えてみた。対象は、鹿児島教区の高校生、時期は夏休み、場所は韓国の江華島(仁川国際空港がある島から北にある韓国で三番目に大きい島で、仁川カトリック神学大学と多くの聖地がある)。



ある。ここまで決めて、出会った高校生と高校生の親たちに「韓国巡礼の旅に行こう」と言ってみた。多くの高校生たちに聖地巡礼を通して信仰を育て多様な文化を体験させてあげたかった。特に、男子高校生たちには、仁川カトリック神学大学を案内し、司祭の召命を育ててあげたかった。しかし、最終的に聖地巡礼を申し込んだ高校生は女子6人、男子1人。ここで、多くの男子高生の司祭の召命は「No, No」。それでも男子高生1人に希望をかけて7人の高校生を対象に聖地巡礼を準備した。

オリエンテーションとノベナ
女子高生が多いので、彼女たちを中心に準備を始めた。しかしフィードバックを得ようと送った私の計画はすべて「それはおじさんが好きなことだ」という答えを聞いた。結局、ザビエル教会の教会学校のリーダーたちと姪たちに500。計画を改めて練り直した。結果は大成功。準備したスケジュールを持ってオリエンテーションを行った。まず、班を決めて簡単な注意事項と、私の連絡先を教えさせた。そして、ノベナを強調した。ノベナは、9日間口ザリオをささげる、が、忙しい高校生たちは「主の祈り」「アベマリア」「栄唱」をささげ、ロザリオは私だけが唱える。

日本と韓国の情勢が悪くなり始めた時だった。高校生たちと親たちには「安心して。大丈夫」と言っていた。私が、私は心の中でとても心配だった。ノベナをささげ、マリア様に祈った。「マリア様、助けてください」。いよいよ出発「どこにいるのか」(創世記39) 初めの日①
8月18日、出発。出発前に中野司教様とともに参加者たちと両親、教会学校のリーダーたちと9日目のノベナをささげて、司教様から祝福を受け、記念撮影をして出発した。飛行機に初めて乗る人、韓国の巡礼に行く前に韓国に行つて帰ってきた人、フィリピンから帰国するやいなや韓国に出発する人など、皆、緊張と期待とともに搭乗した。

短信

▼聖ザビエル祝日のミサ
12月3日(火) 18時からザビエル教会で日本宣教の保護者聖フランシスコ・ザビエルの取り次ぎを願うミサがあった。

聖堂には約50人の信者が集まり、中野司教と6人の司祭でささげられたミサで、聖ザビエルにも似た教皇フランシスコの働きを振り返るとともに、キリシタ時代からの福音宣教を回想し、これからの宣教のあり方を考えた。また洗礼名が聖ザビエルの中野司教のためにも祈りをささげた。

▼市民クリスマス
鹿児島キリスト教連合会

▼柳本繁春神父
古田町教会協力司祭の柳本繁春神父(コンベンツァル会)は、9月20日付で本部修道院へ。

修道会便り

▼柳本繁春神父
古田町教会協力司祭の柳本繁春神父(コンベンツァル会)は、9月20日付で本部修道院へ。

わたしの信仰体験

第1回 「聖書の力」



「自分の信仰を確かなものにした」と、「心から祈りたい」、「信じ切りたい」とあっていた頃、何かに導かれるように久留さんから「聖書百週間」の集いに誘っていただきました。そしてまったく何も分からなまま、大して期待もせずに入会させていただき4年が過ぎました。

週に一回、皆さんと一緒に旧約聖書の創世記から読み進め、向き合い、初めての聖書通読を始め2年ぐらいたった頃でしょうか、自分の内面が変わったことに気づきました。はからずもこの聖書百週間グループの皆さんから「変わりましたね」と指摘されたのと同時期でした。

本堂に聖霊のお働きとしか考えられなように変わったのです。私は素直に神の存在が信じられ、感じられ、心から祈れ

るようになっていきました。聖書はやはり特別な書物です。その中には聖霊の働きとお恵みがあり、人間の心を変えてくださることを実感しています。あんなに他所へ信仰の根拠を求めて「図書館へ行ったり、また「読書の中で」と10年間もウロウロと探し求めていたのに、聖書の中に大切なものが確かにあったのです。ありがたいことと感謝しています。

まだまだ分からないことがたくさんありますが、こうして心を込めて真摯に聖書に向き合い、祈っているうちに、必要なお恵みをいただきながら変わらせていただけることを私は信じています。聖書百週間の集いがずっと続いていますように。十神に感謝(匿名希望信徒)

※今月号からこれまでに寄せられた信仰体験を紹介することにいたしました。

+KABAYAN SEKSYON+ Dakilang Kapistahan ni Maria Banal, Ina ng Diyos- Enero 1, 2020.

Sa umpisa ng bagong taon, inaanyayahan tayo ng Simbahan na pagbulayan ang banal na pagdadalang- tao ni Maria bilang larawan ng kapayapaan.

Sa pagkatao ni Maria nagkakaroon ng katuparan ang sinaunang pangako [ng Diyos]. Pinaniwalaan niya ang sinabi sa kanya ng anghel, ipinagbuntis niya ang kanyang Anak, at naging ina ng Panginoon.

Sa pamamagitan niya, ng kanyang "Oo", dumating ang kapunuan ng panahon. Sinasabi ng ebanghelyo na ating karirinig lamang na "ingatan ni Maria ang mga salitang] ito at pinagnilay-nilay sa kanyang puso (Lu 2:19).

Nagpapakita siya bilang isang sisidlang nag-uumpaw ng alaala ni Hesus, bilang Luklukan ng Karunungan na maaari nating dulugan upang maunawaan ang kanyang itinuturo.

Sa ngayo'y tinutulungan tayo ni Maria na unawain ang kahulugan ng mga pangyayaring umaantig sa atin, mga pangyayaring may epekto rin sa ating mga pamilya, sa mga bansa, at sa buong mundo.

Saan mang hindi naaabot ng pilosopikal na pag-iisip at usapang political, doo'y naaabot naman ang kapangyarihan ng pananampalataya, na siyang nagdadala ng grasya ng Mabuting Balita ni Kristo at nagbubukas ng mga bagong landas para sap ag-iisip at pang-uusap.

Pinagpala ka, Maria, sapagkat ibinigay mo ang Anak ng Diyos sa mundo. Ngunit mas pinagpala ka dahil sumampalataya ka sa kanya. Puno ng pananampalataya, ipinagbunt- Is mo si Hesus sa iyong puso at sa kalauna'y sa iyong sinapupunan, at ika'y naging Ina ng lahat ng mananampalataya.

O Ina, ipadala mo sa amin ang iyong pagpapala sa araw na ito na inilaan para sa iyong karangalan. Ipakita mo sa amin ang mukha ni Kristong iyong Anak, na siyang nagkakaloob ng awa at kapayapaan sa mundo. Amen

Kuha sa Homilya ni Papa Francisco (Fr. Dino Orolfo)

い。確かに入国審査場まで一緒に来たのに。皆を荷物受取所の隣に集めて、その高校生を探しに行った。「どこにいるのか」(創世記39) アダムを訪れる神様の姿が思い出された。冷や汗が流れて手が震えた。時間が経つにつれて苛苛してきた。「仁川国際空港は、なぜこんなに広いのか」と。やつと女子高生の姿を見つけた。どんな言葉も言えなかつた。その子の顔も血の気が引いていたから。その後、高校生たちは皆、親鶏を追うひよこのように動いた。

遅い夕食、記念品製作、お泊まり先に到着・誇らしい学生たち
初めの日②
空港の外はもう暗かつた。私の故郷の教会に行くために車両二台(知り合いの仁川教区の神父が支援してくれた)に分かれて乗り、1時間以上走った。故郷の教会で、12人乗りに乗って食卓に再び移

動(韓国に24時間営業する食堂が多いことに感謝したのはいつも不満)そのためかなり遅れた。最初の食事のメニューはサムギョプサルだった。「お腹がすいてるだろう」と思いながら注文をした。後で分かっただことだが量はあまりにも多かつたし、お腹が空いていたのは私だけだった。

食事を終えて仁川駅(仁川駅は「money」という交通カードを自分が望む写真で作れる)に行った。自分たちが望む写真で「moneyカード」を作った喜びながら宿泊所へ向かった。時すでに23時30分を越えていた。宿泊所は仁川教区で運営する青少年のための黙想の家だった。到着したらそこで45年間働いている職員

(続く)

1.開催までの経緯

中野司教は2019年1月24日開催された定例司祭集会(コンベンツス)で「教会を支える三つの柱(鹿児島教区の宣教・司牧の俯瞰)」と題する司牧指針を示し、その意図を次のように話した。「現行の教区の組織の議論に入る前に教会の基本的生命を確認しておきたい。神の呼びかけ、交わり、派遣は教会共同体の本質である。主任司祭は、司牧指針『教会を支えている三つの柱』について信者と分かち合ってほしい。上(の組織)から下へでなく、下から上へと活動を行ってほしい」。

取され、教区本部事務局で集計作業がなされた。8月4日、信徒有志5名が司教のところへ伺い、シノドスをどのように展開していくかについて意見交換を行った。そのとき司教からこのメンバーに鹿児島市内の教会からも1、2名参加してもらいシノドス準備委員会を開催していくことが決められた。その後8月17日、9月21日、9月12日、9月28日、10月4日、10月12日の合計6回準備委員会を開催して本会議に臨んだ。

鹿児島教区シノドス提言書(1)

教区シノドスのテーマ

「教会の3つの柱(集まり、交わり、派遣される)を生きる」

配布して代表者の準備を図るとともに、①グループ討議のテーマを策定、②シノドスでの実行計画の作成と準備を行い、教区シノドスに臨んだ。10月13日の全体会議、グループ討議、交流会、14日の全体会議でのグループ討議の発表、派遣のミサで終了した。参加者は、司祭、修道者、小教区代表者、活動団体代表者総勢103名であった。

1マについてのグループの報告を参照してもらえれば、信徒の生の意見が読み取れる。別途にある報告書を参照してほしい。

2.教区シノドス採択提言書

第1部：第1の柱「集まり」に対する提言

提言1 聖書に親しむことに関する提言

①全小教区で「聖書愛読運動」を再展開し、各自、自分の聖書を持ち、個人的に、あるいは共同体で、日々聖書に親しむよう推進していく。

②具体的方法は、聖書通読、聖書の分かち合い、聖書百週間、レクチャオデイヴイナ(霊的読書)などを教

る。鹿児島教区でも1973年から教区目標として「聖書に親しむ運動」を開始してきたが、残念ながらいまだもって信者全員に普及しているとは言えず自分の聖書を持つて常に親しんでいる信徒はごくわずかにすぎない。こうした現状を改善するための提案である。

提言2 班制度(教会内福音化)に関する提言

①教会という神秘体の「まじわり」は時代が変わっても不可欠な要素であるから、班制度の見直しを図る。

②そのために、班制度の意義の説明、班集いのやり方、その中で信仰養成の方法すなわち「聖書の分かち合い」「カテキズム(要理)」の進め方、リーダー(役員・班長)養成などについて教区全体で組織的な展開を進めていく。

「教会の3つの柱(集まり、交わり、派遣される)を生きる」

「班制度」がスタートしたのは1982年であるが、2000年ごろから衰退し、形骸化してきた。2014年の教区評議会でも「班制度の見直し」が取り上げられたが、大部分の小教区では班という組織はあっても班集いは開かれておらず、開催されていてもその中身は「教会からの連絡や行事の相談」が中心で、その場が信仰養成の場となっていない。小教区における共同体づくりという観点からしても、班制度は重要なものであるから、早急に

取り組むべきである。第2部：第2の柱「交わりと一致」に対する提言

提言3 主日のミサに関する提言

①主日のミサの参加者が少なくなっている現状を改善する。

②信徒相互の絆を深めるために、デジタル技術の活用を推進する。

提言4 外国からの移動・移住者との連携に関する提言

①それぞれの小教区にいる外国からの移動・移住者名簿をつくる。

②外国からの移動・移住者との交わりを盛んにする方策を検討する。例えば、子弟の信仰教育、ミサや告解を彼らの言語で行う対

策、出国側と受け入れる側の教区・司教協議会との連携などを具体的に検討する。サポーターセンターまたは窓口を作り担当者を置く。

③かつて国内でも移動信徒対策を組織的に実施してきたノウハウを活用する。

提言5 若者と教会に関する提言

若者は昔も今も理想に燃え役に立ちたいという情熱をもっているから、上手に彼らの夢を引き出していく。

①若者と同伴する青年担当の司祭を任命し、少なくとも5年以上の任期とする。

提言6 社会とのかかわり(社会福音化)に関する提言

①教会が行っている社会活動を信徒および一般社会に広報するための広報室をつくる。(4頁へ続く)

若者の教会離れが叫ばれて久しいが、それなりの原因があると考えられる。それは世俗化、消費主義、多様化、情報化の著しい発展などが背景として考えられる。彼らの信仰面の養成を考へても小学高学年から中学生までの堅信のための知識のみで、それ以降の年齢に応じた養成が十分ではなかったと考えられる。ワールドユースデイに参加した青年たちの提案から生まれたYOU-CATはその典型であり学びもしたいという希望がある。今回の討議でも彼らから将来の教会の姿に対する懸念、外国から来て対する若者との交流、SNSを使う他の教区の若者との交流、ボランティアなどたくさんアイデアが提案された。



教区シノドスでの各グループからの発表 (10月14日)

②地域社会との交流を図り、教会の敷居が高いことを改善する。

③社会問題にかかわっている個人・グループが孤立しないように、横の連絡をとれるように、センターとなる組織を整備する。

④社会の福音化が教会の使命であることを理解できるように、学び・実践する信仰養成プログラムを作る。

(提案理由)

わたしたちキリスト者は、「地の塩、世の光」として、生活の場である社会の福音化に努めなければならぬ。社会の中に福音的価値を見出すと同時に社会の中にある福音に反するものを変えていくこととなる。これは、個人の問題であると同時に教会全体の問題である。鹿児島教区がどのように社会とかわかっているかが今問われている。今できることは、先ず現状を正確に把握することである。教区内で社会問題に

①上記のデータ化が完成した後、必要に応じて信徒も活用できるようにする。

②事務局に信徒を採用して人材の拡充もお願いしたい。特に定年退職者が社会人としての培った能力を活用する。

③教区本部と小教区との連絡体制を改善する。

(提案理由)

活き活きとした職場(役所、会社、団体な

ど)となるためには、①仕組みがふさわしいものとなっているか、②成員の能力がふさわしいか、③職場風土が良いかの3本柱が大事だと言われている。どれかが弱いと分かったらそこにテコ入れを行うことが不可欠である。このことは教会組織でも同じことが言える。

教会は神に招かれた者の集まりであり、このことがとても重要であるし、社会の目から見て信用される団体であるかどうかまさにここにある。

教区の過去の動きを調べてみると組織についてもいろいろなことが討議され、実行に移すためのルールが定められているが、それにかかわった人は良く分かっている。

①家庭の問題に福音の光を当てるためには、家庭の現実を直視することが必要である。そのために教区の情報者の現状を把握する。

②信者の年代・家族構成、信仰生活の実態を調査した上で、家庭の抱えている問題に福音のメッセージを投げかける。

③小教区内においては、班会・司牧評議会などで家庭の問題を議題に上げて話し合う。

④教区全体では家庭の問題に取り組みするためのプロジェクトチームをつくる。このチームは、若者・高齢者の問題についても検討することになる。

(提案理由)

信者の家庭の問題は、今の日本の家庭が抱えている問題と共通しており、複雑多岐にわたり、深刻である。

少子高齢化の波は、教会共同体にも影響を与えており、教会の存続にかかわる重大な問題。一人住まいの信者、老後を施設で過ごしている人、非正規雇用で働いている若者、年金生活での生活不安、葬儀の心配、非婚晩婚化などの悩みに、教会がどのようなスタンスで対応するかが問われている。そのために、先ず教会が取り組む姿勢(福音のメッセージ)を全信者、更に一般社会に示すことである。

分科会で現状について多くの意見が出たが、これらは今の教会が対応しなかった(できなかった)こと、現れであると、私たちは反省しなければならぬ。その上で、具体的に行動することが必要である。既に「ゆらいあい」「とそ子ども食堂」は、社会の中で、家庭の問題に取り組んでいると言える。

家族全員が信者でない家庭も多く存在している。わたしたちの信仰を伝えるために、どうすれば良いのかが問われている。日曜日にミサに行くことで満足するのではなく、キリスト者として家庭の中で信仰が生きる喜びであることを証ししなければならぬ。

わたしたち自身の福音化が必要だ。世俗の価値観から解放されるように、聖書の学びと深い祈りを継続しなければならぬ。そのためにも信仰養成の場を設けることが必要である。

第4部 提言を實行するのことに對するお願い

提言10 今後は非実践していたきたい提言事項

①聖書愛読運動の推進

②成人向けの要理(カテキズム)教育の推進(信仰と生活の一致を図る要理)

③班制度(基礎共同体)の復活推進

(提案理由)

現在置かれている普遍教会(カトリック教会)は世俗化、個人主義などの影響により、教会離れが急速に進んでおり深刻な状況にあると言われている。鹿児島教区も同じだと言える。原因は受洗者の信仰のセンスの希薄化、神の民として救われるという第2バチカン公会議の考えが逆戻りして、個人としての信仰(共同体離れ)の陥っていることが主な原因と言われている。

対策として急がれるのは信徒全員(熱心な信徒のみでなく)が個人として参加できるプログラムの実行が必要だと考える。具体的には上記3項目の提言実行が個人としても小教区としても教区としても最優先課題として取り組むことが不可欠と考えるからである。

提言11 今後の推進に向けての提言

①今回提言された事項について、信徒と司祭が協働して実行する組織をつくる

鹿児島教区シノドス提言書(2)

教区シノドスのテーマ 「教会の3つの柱(集まり、交わり、派遣される)を生きる」

今回シノドス参加者(信徒、修道者、司祭)が作成した11の提言を司牧者として冷徹な目で見て、司教としての応答を明示することをお願いしたい。福音宣教のために司祭・修道者・信徒の使命は何か、どのように行動していけばよいのかについて、具体的なプログラムを検討してもらいたい。

司祭団としても、これまでの司牧実践を振り返り、宣教共同体として協働参加・共同責任の態勢が十分できていたのかについて検証してもらいたい。その上で、今後鹿児島教区の刷新のための具体策を提示して欲しい。

鹿児島県民に希望を与える教会になることを祈ります。

かかわっているグループの存在、活動の内容を知ることである。その上で個々の活動グループの横のつながり、さまざまな活動機関との連携、個々の抱えている問題の解決をしていくような場所が必要であると考えられる。

社会問題にかかわるためには、聖書、社会教説の学びも必要である。カトリック中央協議会が発行している「いのちへのまなざし」「なぜ教会は社会問題にかかわるのかQ&A」の学習会を開催してほしい。

提言7 教区組織の充実に關する提言

①組織の見直し、規則類の整備、信徒名簿・秘跡台帳などのコンピュータ化

提言8 高齢社会と教会に關する提言

①教区として司祭・修道者・信徒の力を結集して「高齢社会対応検討チーム」(仮称)を早急に創設し、継続的かつ効果的な検討を行う。

②高齢者自身の信仰のあ

り方の研修が必要である。

③その検討チームの中で、「高齢に達した聖職者・修道者のケア」や「聖職者の高齢化の問題」などにとどまらず、高齢社会に対応した宣教司牧の在り方を探っていく。

④「定年退職者の活躍の場」「高齢者のタレントに応じた役割」「女性のタレントを活かした役割」などを検討する。

⑤集会祭儀司式者・臨時聖体奉仕者を養成する。

(提案理由)

急速に進む高齢化は日本社会全体の問題であるとともに、教会の問題でもある。その影響は数字や事例を挙げるまでもなくあらゆる場面で拡大かつ深刻化している。今回のシノドスでは

第4部 提言を實行するのことに對するお願い

提言10 今後は非実践していたきたい提言事項

①聖書愛読運動の推進

②成人向けの要理(カテキズム)教育の推進(信仰と生活の一致を図る要理)

③班制度(基礎共同体)の復活推進

(提案理由)

現在置かれている普遍教会(カトリック教会)は世俗化、個人主義などの影響により、教会離れが急速に進んでおり深刻な状況にあると言われている。鹿児島教区も同じだと言える。原因は受洗者の信仰のセンスの希薄化、神の民として救われるという第2バチカン公会議の考えが逆戻りして、個人としての信仰(共同体離れ)の陥っていることが主な原因と言われている。

こと(例えば、「仮称」鹿児島教区シノドス提言実行委員会の立ち上げ)

②重点実施事項を策定すること(例えば、信徒及び司祭の生涯養成)

③教区・小教区における推進計画の立案と実行、そのフォロー体制の確立(例えば各小教区における、実施計画のためのプログラム作成)

(提案理由)

司教のシノドス発題から実際の会議まで5か月という短期間でのシノドスであったが、参加者はそれぞれの思いと希望を持って参加してくれた。

信徒は、信徒同士、また司祭たちとの交わり、分かち合いができたことは素晴らしい出来事であった。「教会とは私たちである」という意識を持つ良い機会が与えられたのではないだろうか。



「対等」が生かされる教会に(2)

紫原教会主任司祭 山口 好信

川村教授が述べた第二バチカン公会議の目指す教会のポイントには三点ありましたが、その第一点は「中世以来のヨーロッパ文化と教会の結合というヨーロッパ中心主義の克服」でした。もう少し触れておきます。さて、現代日本は生きる厳しさや種々の制約も皆無ではありませんが、それでも「民主主義の社会」です。一人ひとりが平等で「対等」の権利、天賦人權と言われるものを持つています。発言権も行動の自由も持っているのです、それほど束縛感・抑圧感はないでしょう。ところが、カトリック教会に入ると、そこに民主主義とは異質の世界が広がっているとするれば、どうでしょうか。

森一弘司教は、教会では「上からの視線で社会を見、人々に語りかけていこうとする聖職者中心主義は、根底から払拭されているとはいえない」と「カトリック教会が、今もって教義主義、秘跡主義、権威主義から抜け出せず…」(一) 教皇フランシスコは、ど

神を愛することについて、共観福音書の中でイエスは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、(力を尽くして) あなたの神である主を愛しなさい。」と教えられました(マルコ12・30、マタイ22・37、ルカ10・27)。この言葉を基にして、神様を愛することと回心について考えてみましょう。

「思い」と訳された言葉は原語では、心、思考力、理解力、分別、理知といった意味をもつ「ディアノイア」です。この言葉は「〜によつ

のような教会を目指そうとしているのか』『家庭の友』2018年7月号)と言っています。今、日本社会で自由・平等に行動できている人たちが、抑圧的な教会に来るでしょうか。聖職者中心ではなく、司祭も信徒も対等な関係の「民主的な」運営がなされる教会となるべきでしょう。

「民主主義」は専制的ではない人民主体の社会であるとする思想ですが、カトリック教会の歴史と深い関わりがあります。かつてフランスは聖職者を第一身分、貴族を第二身分、平民を第三身分とする身分の階級社会でした。聖職者の中でも司教は司祭と違って聖俗両権と免税などの特権を持っていました。平民が日常の食べるパンがなくて困っている、司教は彼らを助けてはくれなかったのです。司教は支配者の側にいました。ですから下級の多くの司祭たちは第三身分の立場で革命側に立つて参加しました。司教はいちはやく世俗の

て)を意味する「ディア」と「知」全般を意味する「ヌース」の合成語であると言われています。この「ディアノイア(知力)」は、「精神」と訳された言葉(プシキケー)との比較によつてその意味合いがより深く理解できます。「プシキケー」は肉体に向かう精神の働き(命、息、心)を意味します。これに対して、「ディアノイア」は「プ

し、神様を愛することと回心について考えてみましょう。

山口 好信

権力と財産を捨てて平民・庶民の側につくべきでした。やつと第二バチカン公会議によつてその方向に動き出したのです。ところが、日本でも著名なマルティーニ枢機卿(2012年、死去)は「カトリック教会は二百年ほど時代から取り残された。官僚組織が肥大化し、儀式と服装ばかりが仰々しい」と嘆きました。今から二百年前は、フランス革命(1789年)の時期に当たります。それほどカトリック教会は遅れているのです。この「遅れている」という感覚を持つ必要があると思います。かつて精神医学概論の授業で、「病感」と「病識」という言葉を習いました。「病感」はさておき、「病識」とは「自分は病気のようだ。病院に行つて診てもらおう」と、行動につながるような意識を持つてのことです。司教や司祭は教会に関してこの「病識」を持つていないでしょうか。信徒からの様々な指摘をきちんと受け止めて教会改革

「知」全般を意味する「ヌース」の合成語であると言われています。この「ディアノイア(知力)」は、「精神」と訳された言葉(プシキケー)との比較によつてその意味合いがより深く理解できます。「プシキケー」は肉体に向かう精神の働き(命、息、心)を意味します。これに対して、「ディアノイア」は「プ

し、神様を愛することと回心について考えてみましょう。

し、神様を愛することと回心について考えてみましょう。

山口 好信

もちろん教会は政治団体や世俗の集団と違って、神、キリスト・イエスをいただく集団ですから、民主主義が究極的な原理ではありません。指導や教導が必要なのは承認されるべきでしょう。しかしこれが神の御意志である、これが神法であると言えるほどのことがどれだけあるのでしょうか。司教・司祭の「権威・権能」といった仰々しい言葉は果たして聖書的でしょうか。そのことを一体どれだけの信徒が無条件に承認しているでしょうか。

司祭も信徒も皆で祈り神の御旨をたずね求めながら、進む方向を決めていくというのが、聖書的かつ現代的なやり方であつて、司教・司祭が権威的・一方的に決めるといふのは、神の望みとは言えません。そもそも西欧で司教・司祭と一般信徒の間を大きく隔てるようになったのは11世紀のグレゴリウス改革の頃からです。この辺りのことは、またいずれ述べるつもりです。

に位置付けてしまうものですが、心の働きと知力を対立させることはできません。両者はタイヤの両輪のようなものです。どちらかの力が弱くなれば、真っ直ぐに進むことはできません。実に、知力をもって神様を愛するからこそ、私たちは神様から愛されていることをより深く悟ることもできるのです。それゆえに、神様の愛に応えようとするからこそ回心に至るのです。

回心と訳された言葉は原語では「メタノイア」です。この言葉は「〜と共に」

福音書を見てもイエスは人を身分などで分け隔てしていません。自分たちは神に近いと自任していた祭司や律法学者など指導層を、人に重荷を負わせるだけで助けようとしないと、イエスは強く批判しています。むしろ、自分は小さい者・罪ある者であると自覚していた人たちのほうが神に近い存在だと言っています。これは「司教・司祭は上で、信徒はその下」という伝統的なヒエラルキー(聖なる位階制)の考えとは真逆ではないでしょうか。確かに、イエス亡き後、十二使徒たちは別格だったでしょうが、遅れて使徒になったパウロは、使徒たちの頭(かしら)であるペテロを叱っています。なぜなら、信仰の真理のほうが使徒の権威より重要だからです(ガラテヤの信徒への手紙第2章)。

カトリック教会は、権威主義からの脱皮はまだ十分ではありません。第二バチカン公会議の精神はまだ教会に根付いていないのです。皆が「対等」の精神で運営される教会に変化していかないと、カトリック教会は民主的な現代に生き残れないだろうと思います。

を意味する「メタ」と既述した「ヌース」の合成語であると言われています。先程の「知力(ディアノイア)」と同じく「ヌース」が含まれています。ここからも神様やイエス様の愛に込めて回心をするために、知的なものも必要であることが伝わっています。愛するためには知力も必要です。愛に込めるためには知力を等閑にはできないのです。

「メタ」にのみ「力を尽くして」という句が見られない。

「メタ」にのみ「力を尽くして」という句が見られない。

会と催し 1月

- 1日(水) 神の母聖マリア
- 4日(土) 世界平和の日
- 4日(土) 七田八十吉神父命日(1980年)
- 5日(日) ルカ神父命日(1998年)
- 5日(日) 主の公現
- 7日(火) 教区司祭新年会
- 8日(水) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 8日(水) 鄭成深神父叙階記念(2009年)
- 11日(土) 読書会・教区本部・16時
- 12日(日) 主の洗礼
- 14日(火) 永島泰蔵神父命日(2002年)
- 18日(土) キリスト教一致祈禱週間・25日

- 19日(日) 年間第2主日
- 19日(日) ハインシク神父命日(1989年)
- 20日(月) 司祭大会・教区本部・23日
- 20日(月) 司祭評議会・教区本部・14時
- 21日(火) 森一弘司教講演会・ザビエル教会・19時
- 23日(木) コンベンツス・教区本部・10時
- 25日(土) パウロの回心
- 26日(日) 郡山健次郎名譽司教霊名
- 26日(日) 年間第3主日
- 29日(水) 世界こども助け合いの日(献金)
- 29日(水) オリーブの会・教区本部・14時
- 29日(水) フェリエ神父命日(1919年)
- 31日(金) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 31日(金) ウォラ神父霊名(聖ヨハネ・ボスコ)

- 【司教日程】7日教区司祭新年会、15日大口明光学園理事会、16日司祭生涯養成部門会議(東京、20〜23日司祭大会)
- 祈りの意向
- 【祈禱の使徒会】
- 福音宣教 世界平和の促進
- 日本の教会 いのちを守る

「すべての人を一つにしてください」という最後の晩さんでのイエスの祈りに耳を傾けるわたしたちはまた、折にふれて目に見える一致を示すように求められています。それは、ともに祈り、支え合うことによつて、神がすべての人の救いのためにイエスを遣わしたことを「世が信じるため」です(ヨハネ17・21〜23参照)。キリスト教諸教会の間で毎年1月18日から25日に定められている一致祈禱週間は、このことを強く意識する機会となるでしょう。この一致祈禱週間のために、教皇庁キリスト教一致推進評議会と世界教会協議会は1968年以来、毎年テーマを決め、「礼拝式文」と「8日間のための聖書と祈り」を作成しています。日本ではカトリック中央協議会と日本キリスト教協議会が共同で翻訳し、小冊子を発行しています。

ウガンダの旅2018

食品工場の見学 ⑪

谷山教会信徒 岩崎正幸

ワールド・ビジョン・ジャパンを通じて貧しい国の子どもの支援を続けているラ・サール学園教諭の岩崎正幸さんは、一昨年夏、支援している子どもがいるウガンダを訪問した。これは生徒のために執筆した「ウガンダの旅2018」の11回目。

8月2日朝。この日もアザン。再びナラウエヨ・キシータ地区訪問。工場見学と学校訪問が予定されている。4号車のはずだったが、クーラーの故障で、本来は荷物車として使っていた6号車へ。実は6号車が一番新しく快適。

まずは事務所へ。事務所の周りはちよつとした商店街。といっても雑貨屋が数件あるくらいだが。あるお店の前に屋台。何かを焼いていておいしそう。チャパティというペラペラのホットケーキのようなおやつだ。1枚購入、1000シリングだったと思う。のぞきに来たツアーの皆さんにお



完成前の加工場入口、背後にキャッサバの畑

ウガンダでは他に高速道路の建設が中国資本によって行われている。わたしたちが訪ねる工場の方はほとんど奥に入っている。奥にもトラックなど通れそうもない道を進む。着いたところは教会であった。どうやらそれはかつての教会で、今は小学校の校舎として使われているのであった。こんな奥にも学校

がある、と感心した。そして、たくさんのごもたち。工場見学よりもこちらの授業の方がおもしろそう。でもまたスタッフから注意されそうなので、素直に工場の方へ。

すそ分け。チャパティを食べながら屋台の前で立ち話をしていたら、WVJ(ワールド・ビジョン・ジャパン)のスタッフから「余計なことをせずに出発しますよ」と注意されてしまった。すみません。

工場見学といっても食品工場というところらしい。まだ建設の途中で、完成していないのだが、建物そのもののはできていた。途中、大型トラックが何台も出入りする大きな工場が見えたが、それは違う。そこはどうかや中国資本の本格的な工場のような。アフリカにはかなり中国資本が入っているとのこと。

この食品加工工場は、このあたりで生産しているさつまいもやキャッサバ、バナナなどを乾燥・加工すること、長期間の保存を可能にし、各家庭では子どもたちの弁当への利用が考えられる、ということだ。各家庭でそれぞれ加工するよりは効率よくできる。今のところ自分たちで使うことを想定しているが、将来は出荷することも考えているという。でも出荷するにはそれもトラックが入ってこれ

ないんじゃないかと思つたが。このあたり、電気がきてないの、「それはどうなる？」と思つたが、ソーラーパネルで乾燥機やスライサーなどが稼働するという。加工場自体は、山崎製パンがお金を出しているそう。実は山崎製パンはWVJの大口の支援者(支援社?)で、WVJのキャンペーンにもいろいろ参加している。市販のパンではそういうことはわからないのである。現在手作業で行っているという加工品、ドーナツなどのおやつをいただく。

加工場の内部を見学する。全体の広さは教室四つ分くらいだろうか。生産物を洗うところ、スライスするところ、乾燥室(乾燥機)、貯蔵庫、そして工員の更衣室などからなる。乾燥機はすでに設置されていた。「加工場としてはそれほど見ればきものはないなあ」と思つたが、工事の適当さ加減

短歌
吉野教会 中江均
教皇ミサ多言語祈願捧ぐ間に陽射し充ちたり
長崎の空

の方々からおみやげ。さつまいもスティック、ゆで卵、ゆでピーナツ。卵は例によって黄身が黄色くない。

次に農家訪問。キルヤンガ地区でも訪問したように、スプリングラーの設置で乾季にも耕作可能となった畑の視察。入ってすぐにパッションフルーツ。そして、どうもさつまいも、さつまいも、キャッサバ。残念ながらこのお宅の畑にはコーヒの木はなかつた。粉にする前のどうもさつまいもをひつまみいだいてくる。どうもさつまいもも黄色くない。そういう種類なのか、栄養の関係なのかはわからず。こちらの農家ではスプリングラーが勢いよく稼働。かなり広い範囲で散水ができる。近くの大きな池から水を汲んでいるそう。池は見なかつた。スプリングラーの設置、1台8千万シリングと聞いて目が飛び出しそうになったが、20万円ほど。普通か。

KJP (鹿児島正義と平和協議会) 通信 1月号

昔、きぼうの電話の養成講座を受けたとき「世界中の首脳たちがこの講座を受けて、互いの声に耳を傾けることを学べば、世界は平和になるの」と、思ったことがありました。現実味のない馬鹿げた考えだと思われながらも、私自身、実際の国際外交や政治は、私たちの考えも及ばないほど高度で複雑で陰謀に満ち満ちていて「国益」という名の「何か」を最優先する流れに押し流されていきます。そして「国益なるもの」を優先しようとするとき、そ

のしわ寄せをかぶるのは、いつも「弱い人たち・小さくされた人びと」です。えらい人たちはそれもやむを得ないと考えています。小さくされた人びとは、その肩身の狭さから、なかなか声を上げられずにいるので、多くの人たちは「貧困なんて現実にあるの?」などと思つています。

しかし、暗闇に目を凝らし、沈黙に耳を澄ませば、現実には多くの苦しみに満ちていることがわかります。それに対して何ができるのか? 最も小さくされた人び

と以外の人たちも、自分のことで精いっぱい、人のことを構っている余裕などありません。きぼうの電話やいのちの電話もボランティア不足だと聞きます。いま、教会や信者に何が求められているのか? 少子高齢化社会で、ミサの参加者も減っています。

イエスさまは病気の人を治されたとき、「あなたの信仰があなたを救ったのだ」と言われました。私たちが出来ることは、信じて疑わず、たとえ小さなことでも、自分のできることをこつこつとおこない続けること。信頼して歩みを起すこと。これしかありません。

神さまはわたしたちを愛

しています。私の大嫌いな人をも神さまは愛しています。そして驚いたことに、神さまはこんな私たちを何も言わず信頼して、じつと見つめ、待っていてくださいます。

フランシスコ教皇は、長崎・爆心地公園でのスピーチで「今日の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活を強いられるままです。しかし、武器の製造、改良、維持、商売に財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いつそう破壊的になっていきます。これらは神に歯向かう(テロ行為)です」と明言しました。そして「核兵器から解放された平和な世界の実現には(すべての人の参

ユースカトリックキャンプ(YCC)
テーマ「教皇フランシスコ」

日時：3月27日(金)～30日(月)
場所：日向学院海の家(日南市)
申込締切：2月29日
問い合わせ：岩崎正幸(ラサール高校) TEL.099(268)3121

森 一弘司教講演会
教皇フランシスコのこころ

日時：1月21日(火)
時間：午後7時～午後9時
場所：ザビエル教会大聖堂

加が必要で」と訴えました。「個人、宗教団体、市民社会、核兵器保有国も非保有国も、軍隊も民間も、国際機関も」と。

人びとの意識が変わるのに、世界は長い長い時間を要します。しかしその待ち時間を短くできるのは、私たち一人ひとりの生き方にかかっているのです。

(谷山教会 本村裕之)

▼社会問題の分かち合い(毎月第三土曜日)
日時：1月18日(土) 13時～16時
場所：教区本部
内容：原発・改憲・沖縄問題についての情報交換その他